

3 慢性骨盤痛症候群の治療選択と 漢方薬の有効性

昭和大学医学部泌尿器科学講座

前田 佳子、平松 綾、松井 祐輝、鶴木 勉
中里 武彦、押野見 和彦、森田 順、直江 道夫
小川 良雄

【背景】

慢性骨盤痛症候群(Chronic pelvic pain syndrome:CPPS)は「少なくとも3カ月から6カ月以上続き、妊娠に関連なく、骨盤領域に認められ、生活に支障をきたし、治療を必要とする疼痛」と定義される。器質的疾患のみならず機能的疾患、精神的要因が複数に重なって存在する場合も多く、その診断と治療にはしばしば難渋する。CPPSには間質性膀胱炎(Interstitial cystitis:IC)と診断がついて、局所療法を行う場合もあるが、外陰部痛を含む骨盤全体の痛みを訴える患者も少なくない。いわゆる西洋医学的治療で十分な効果が得られなかった症例に対して、漢方薬の併用で症状が改善するとの報告も多く認められる。慢性疼痛を訴える患者に対して、抑肝散投与で不安や不眠に加え、疼痛コントロールも良好となった症例を経験したので報告する。

【対象と方法】

CPPSと診断され、西洋医学的治療を行い、治療効果が不十分であった患者に対して抑肝散の投与を行った。抑肝散投与前後でNRS(Numerical Rating Scale, 数値評価スケール)を行い、有効性を評価した。

【結果】

抑肝散を投与した症例は12例、年齢の中央値は66歳(range 41~88)、性別は女性10例、男性2例。症例の内訳はCPPS6例、ハンナ型IC3例、非ハンナ型IC3例であった。12例中10例において投与前に比べてNRSスコアが改善した。

【考察】

抑肝散の効能・効果は、虚弱な体質で神経が高ぶるものの神経症、不眠症、小児夜なき、小児とされている。CPPSにおいては精神的要因も関与していることが分かっており、抑肝散の効能である神経症に対する効果が有効であることが推測される。一方、ラットやマウスのin vitro実験で、抑肝散にはセロトニン神経系への作用が認められている。セロトニンは末梢では発痛物質、中枢では下降性疼痛制御系の伝達物質として働いている。セロトニン放出に伴う痛覚過敏にはセロトニン2A(5-HT_{2A})受容体が関与しており、抑肝散は5-HT_{2A}受容体のダウンレギュレーションによる抑制作用があることから、セロトニンが関与する疼痛に効果があるものと考えられる。

【結語】

CPPSにおいては器質的疾患のみならず機能的疾患、精神的要因が複数に重なって存在する場合も多く、抑肝散は精神的要因と疼痛抑制の両面から症状を緩和する可能性があると考えられた。